



第1章 市の概況

第1節 位置・面積・気候

会津若松市は、福島県の西部、会津盆地の東南に位置し、東は全国3位の面積を持つ淡水湖、猪苗代湖を境とし、南には溪流や山岳などの豊かな自然に恵まれた芦ノ牧温泉があり、西は宮川を境としています。

本市の市域面積は、約383km²であり、地形は東西に約20km、南北に約29km、海拔は218.32mです。また、本市を南北に阿賀野川水系の阿賀川が流れており、新潟県を経て日本海に注いでいます。

気候は、年平均気温約11℃、年間平均降水量は約1,200mmとなっており、内陸盆地特有の気候を示し、夏期は太平洋側の気候で蒸し暑く、冬期は日本海側の気候で好天が少なく降雪量が多くなっています。

第2節 歴史・沿革

本市の歴史は古く、古事記や日本書紀などにも「相津」という地名が記されており、東と北の会合重要な接点として位置づけられています。この「相津」が後に「会津」になったとされています。

城下町としては、至徳元年（1384年）に葦名直盛が「館」を築いたのがはじまりといわれています。そして、蒲生氏郷の時代に従来の館を大改修して七層の城を築き「鶴ヶ城」と命名し、後世に残る城下町の再編・整備を行い、地名を「黒川」から「若松」に改称しました。

その後、徳川三代将軍家光の異母弟である保科正之によって会津藩が確立され、白虎隊の悲劇でも有名な戊辰の戦いで武家時代が終えんを迎えるまで、会津は東北地方の要衝として、その名を歴史に刻んできました。

この長い歴史の中で、会津では教育文化や産業経済が著しい発展を遂げ、特に漆器、酒造などの伝統的な地場産業が振興されるなど、固有の文化も形づくられてきました。近年では、半導体関連の最先端企業が定着するとともに、日本有数のコンピュータ理工学の専門大学である「会津大学」が開学し、産学官の連携による研究・開発協力や新時代に対応できる情報技術の教育などの分野で地域に貢献しています。

明治32年4月に県内初の市制を施行した本市は、昭和26年に町北村と、昭和30年には近隣7か村と合併し、市名も「若松市」から「会津若松市」と改め、名実ともに会津地方の中核都市となりました。

それから約半世紀が経過し、平成の大合併の機運が高まるなかで、平成16年11月1日には本市と北会津村が平成では県内初となる合併をし、また、平成17年11月1日には河東町と合併し、現在に至っています。